

ルカの福音書 61回

神の備え

ルカ 12 : 22～34

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②パリサイ人や律法学者によるイエスの拒否が、決定的になった。
- ③拒否という現実の中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。
- ④クリスチャンは、霊的戦いに巻き込まれているのである。

(2) ルカ 12 : 1～13 : 17 の内容

- ①恐れなき信仰告白 (12 : 1～12)
- ②永遠の視点 (12 : 13～21)
- ③神の備え (12 : 22～34)
- ④人の子の来臨 (12 : 35～48)
- ⑤苦難の日の予告 (12 : 49～59)
- ⑥悔い改めの勧め (13 : 1～9)
- ⑦教えの正しさを証明するしるし (13 : 10～17)

(3) 注目すべき点

- ①7つのポイントは、拒否の現実の中でいかに生きるべきかを教えたものである。
- ②前回の箇所（永遠の視点）
  - \* 富むことだけを考え、霊的なことを考慮しない人は、愚か者である。
  - \* 永遠の視点がない人は、愚か者である。
  - \* 人生の優先順位が混乱している人は、愚か者である。

2. アウトライン

- (1) 鳥から学ぶ。(22～24節)
- (2) 草花から学ぶ。(25～28節)
- (3) 御国を第一に求める。(29～31節)
- (4) 恐れを捨てる。(32～34節)

3. 結論：思い煩いか信仰か

思い煩いと信仰の対比について学ぶ。

### I. 鳥から学ぶ。(22～24節)

#### 1. 22～23節

Luk 12:22 それからイエスは弟子たちに言われた。「ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようかと、いのちのことで心配したり、何を着ようかと、からだのことで心配したりするのはやめなさい。

Luk 12:23 いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものだからです。

##### (1) 「それから」

- ①「愚かな農夫のたとえ話」で教えられたテーマが続いている。
- ②教えの対象は、弟子たちである。

##### (2) イエスは、肉体的なことで過度に思い煩ってはならないと言われた。

- ①食事と衣服は、地上生活において必要なものである。
- ②しかし、これらは人生の2義的要素であり、過度に心配すべきものではない。
- ③「いのち」(生きるということ)は、食べ物や着る物以上のものである。
- ④それゆえ、食べ物と着る物を優先する人は、愚か者である。

#### 2. 24節

Luk 12:24 鳥のことをよく考えなさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。それでも、神は養ってくださいます。あなたがたには、その鳥よりも、どんなに大きな価値があることでしょう。

##### (1) 教えを印象づけるために、鳥が取り上げられる。

- ①レビ11:15では、鳥は不浄食物とされている。
- ②鳥の中では最も取るに足りない鳥が取り上げられている。

##### (2) ラビ的教授法(小から大の議論)

- ①鳥でさえも、神は養ってくださる。
- ②鳥以上に価値ある人間を、神が養ってくださらないはずがない。
- ③特に、イエスを信じた弟子たちには、神の守りが与えられる。

### II. 草花から学ぶ。(25～28節)

#### 1. 25～26節

Luk 12:25 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるでしょうか。

Luk 12:26 こんな小さなことさえできないのなら、なぜほかのことまで心配するのですか。

(1) いくら心配しても、自分の寿命を1日でも延ばせる人はいない。

① 「愚かな農夫のたとえ話」は、そのことを教えている。

(2) ラビ的教授法 (小から大の議論)

① 人間は、こんな小さなこともできない。

② ましてや、それ以上のものを思いどおりに動かせるはずがない。

## 2. 27節

Luk 12:27 草花がどのようにして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装ってはいませんでした。

(1) 話題が、動物界から植物界に移行する。

① 草花は、自分では何もできない。

② 草花は、神に依存して育っている。

③ しかし神は、草花のために素晴らしいことをしておられる。

(2) ソロモンとの対比

① ソロモンは、イスラエルの歴史の中で最も栄華を極めた王であった。

② そのソロモンでさえ、この花の一つほどには装っていなかった。

## 3. 28節

Luk 12:28 今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、どんなに良くして下さることでしょう。信仰の薄い人たちよ。

(1) ラビ的教授法 (小から大の議論)

① 「草」は植物の総称で、当時は、炉に投げ込んで暖を取っていた。

② 今日は野にある草は、明日は炉に投げ込まれる。

③ こんなに取るに足りない草でも、神は華麗に装ってくださる。

④ ましてや、人間 (弟子たち) に良くして下さらないはずがない。

(2) 弟子たちは、「信仰の薄い人たち」と呼ばれている。

① 彼らは、生活の必需品のことで思い煩っていた。

② 彼らは、神に信頼し、必要なものは与えられるという信仰を持つべきであった。

③ 不安や思い煩いは、結局は不信仰の表れである。

### III. 御国を第一に求める。(29～31節)

#### 1. 29～30節

Luk 12:29 何を食べたらよいか、何を飲んだらよいかと、心配するのをやめ、気をもむのをやめなさい。

Luk 12:30 これらのものはすべて、この世の異邦人が切に求めているものです。これらのものがあなたがたに必要であることは、あなたがたの父が知っておられます。

(1) この教えは、誇張法である。

① イエスは、生活の必要を得るために労することは否定していない。

② 2テサ3:12

2Th 3:12 そのような人たちに、主イエス・キリストによって命じ、勧めます。落ち着いて仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。

③ イエスは、生活の必需品のために過度に心配することを戒めている。

(2) 「この世の異邦人」(不信者)は、霊的なことよりも物質的なことに関心がある。

① 生活の必需品のために過度に心配するのは、異邦人の特徴である。

\* 「彼らは、沈みゆく船の中で、特等席を奪い合っている人のようである」

② イエスの弟子たちは、神の備えを信じて歩むべきである。

③ 天の父は、弟子たちの必要をご存じである。

#### 2. 31節

Luk 12:31 むしろ、あなたがたは御国を求めなさい。そうすれば、これらのものはそれに加えて与えられます。

(1) 弟子たちは、御国(メシア的王国)を求めるべきである。

① 御国に付随した永遠に続くものを求めるべきである。

② 御国が実現するための働きに参加すべきである。

(2) この命令には、約束が伴っている。

① 御国を求めるなら、必要なものは与えられる。

② この約束は、墮落した世界という現実の中で理解する必要がある。

③ 信者であっても不信者であっても、例外的に予期せぬ苦難に遭うことがある。

④ しかし、今から心配する必要はない。

⑤ 時がくれば、恵みによって支えられる。

### IV. 恐れを捨てる。(32～34節)

#### 1. 32節

**Luk 12:32** 小さな群れよ、恐れることはありません。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです。

- (1) イエスが導いている群れは、「小さな群れ」であった。
- ① 彼らは、パリサイ人や律法学者から憎まれていた。
  - ② 彼らは、「御国を求めよ」という教えを聞いて恐れを覚えたのであろう。
  - ③ イエスは彼らに、「恐れることはありません」と言われた。
  - ④ なぜなら、彼らに御国を与えることは、父の御心だからである。
  - ⑤ 忠実な弟子は、天の父の所有物を相続するようになる。

## 2. 33～34節

**Luk 12:33** 自分の財産を売って施しをしなさい。自分のために、天に、すり切れない財布を作り、尽きることのない宝を積みなさい。天では盗人が近寄ることも、虫が食い荒らすこともありません。

**Luk 12:34** あなたがたの宝のあるところ、そこにあなたがたの心もあるのです。

- (1) 御国に関心を集中させる方法
- ① シンプルなライフスタイルを確立する。
  - ② 御国が成就するために奉仕する。
  - ③ それは、天に宝を積む生き方である。
  - ④ すり切れない財布を作るとは、永遠の報賞を受け取る準備をすることである。
  - ⑤ 1 ペテ 1:3～5

1Pe 1:3 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことにより、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。

1Pe 1:4 また、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。

1Pe 1:5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです。

- (2) 私たちの心は、私たちの宝のあるところにある。
- ① 地上に宝を蓄えることに関心がある人は、心が地上にある。
  - ② 天に宝を積む生き方をしている人は、心が天にある。

**結論：思い煩いか信仰か**

1. 人生には、物質的富を蓄積することよりも深い意味がある。

(ILL) 私も、家を建てることが人生のゴールになっていた。

(1) 日々、神との交流を楽しむ人は、幸いである。

(2) 永遠の視点を持って歩む人は、幸いである。

2. 思い煩いによっては、何も変えることができない。

(1) 思い煩う人は、信仰が欠如している愚か者である。

(2) 御国を第一に求めるなら、必要なものは与えられる。

3. 神が御国をくださるので、恐れる必要はない。

(1) 患難期が近づいている。

(2) しかし、クリスチャンは携挙される。

(3) 私たちには、メシア的王国とそれに伴う祝福が与えられる。

4. 地上の富を天に移し替える人は、幸いである。

(1) 富のあるところに、心もある。

ルカの福音書 62回

人の子の来臨

ルカ 12 : 35～48

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②パリサイ人や律法学者によるイエスの拒否が、決定的になった。
- ③拒否という現実の中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。
- ④クリスチャンは、霊的戦いに巻き込まれているのである。

(2) ルカ 12 : 1～13 : 17 の内容

- ①恐れなき信仰告白 (12 : 1～12)
- ②永遠の視点 (12 : 13～21)
- ③神の備え (12 : 22～34)
- ④人の子の来臨 (12 : 35～48)
- ⑤苦難の日の予告 (12 : 49～59)
- ⑥悔い改めの勧め (13 : 1～9)
- ⑦教えの正しさを証明するしるし (13 : 10～17)

(3) 注目すべき点

- ①7つのポイントは、拒否の現実の中でいかに生きるべきかを教えたものである。
- ②前回の箇所（神の備え）
  - \*神の備えがあるので、思い煩ってはならない。
- ③思い煩いから自由になると、怠惰な生活に入る危険性がある。
- ③そこで、来臨に備える重要性を教えるために、2つのたとえ話が語られる。

2. アウトライン

- (1) 忠実なしもべのたとえ話 (35～40 節)
- (2) 2種類のしもべのたとえ話 (41～48 節)

3. 結論

- (1) 再臨の約束
- (2) メシア的王国（千年王国）の約束
- (3) 忠実なしもべの使命

人の子の来臨に備えることの重要性について学ぶ。

### I. 忠実なしもべのたとえ話（35～40節）

#### 1. 35節

**Luk 12:35 腰に帯を締め、明かりをともしていなさい。**

- (1) 思い煩いから解放されたなら、いかに生きるべきか。
  - ①常に、人の子の来臨を待ち望みながら生きる。
  - ②「腰に帯を締め」とは、奉仕の準備ができていることである。
    - \*長い上着を帯で締めて短くすると、動きやすくなる。
  - ③「明かりをともしている」とは、闇を消す働き（働き）の準備ができていることである。
    - \*常に、みことばを語る準備ができている。
    - \*常に、証しをする準備ができている。

#### 2. 36節

**Luk 12:36 主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸を開けようと、その帰りを待っている人たちのようでありなさい。**

- (1) ここから、忠実なしもべのたとえ話が始まる。
  - ①主人とは、主イエスである。
  - ②しもべとは、弟子である。
  - ③「婚礼から帰って来て」ということばに過剰な意味を与える必要はない。
  - ④「戸をたたいたら」ということばは、比喩のことばである。
  - ⑤ポイントは、主人を迎える準備ができているということである。
- (2) このたとえ話は誰に適用されるか。
  - ①イエスが昇天して以降の初代教会の弟子たち
  - ②携挙を待ち望む教会時代の弟子たち
  - ③再臨を待ち望む患難期の弟子たち

#### 3. 37～38節

**Luk 12:37 帰って来た主人に、目を覚ましているのを見てもらえるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに言います。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばに来て給仕してくれます。**

**Luk 12:38 主人が真夜中に帰って来ても、夜明けに帰って来ても、そのようにしているのを見てもらえるなら、そのしもべたちは幸いです。**

- (1) 主人は、目を覚まして待っているしもべたちを見て感動する。

- ①ルカは、「まことに、あなたがたに言います」という表現を使っている。
- ②ルカ4:24にも出ていた。

Luk 4:24 **そしてこう言われた。「まことに、あなたがたに言います。預言者はだれも、自分の郷里では歓迎されません。」**

- ③この表現は、次に語られる約束が確かであることを強調している。

(2) その約束とは、主人としもべの役割が逆転するということである。

- ①イエス時代には、主人がしもべに給仕することはあり得なかった。
- ②そのあり得ない逆転が起こる。
- ③初臨のときに低くなられた神の子が、来臨のときに再び低くなられる。

(3) **ユダヤ的時刻による真夜中と夜明け**

- ①真夜中は、「the second watch」(第2見張り時)である。

\*午後9時から午前0時

- ②夜明けは、「the third watch」(第3見張り時)である。

\*午前0時から午前3時

- ③人が眠る時間帯でも、このしもべたちには、主人を迎える準備ができています。

#### 4. 39~40節

Luk 12:39 **このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、泥棒の来る時間を知っていたら、自分の家に押し入るのを許さないでしょう。**

Luk 12:40 **あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのです。」**

(1) ここで、別のたとえ話が挿入される。

- ①ここでは、人の子の来臨が「泥棒の出現」にたとえられている。
- ②強調点は、予期せぬ時に人の子が来臨するという点である。
- ③忠実なしもべのたとえ話は、弟子たちへの励ましであった。
- ④泥棒のたとえ話は、弟子たちへの警告である。

(2) 「あなたがたも用心していなさい」が、泥棒のたとえ話の適用である。

- ①人の子は、思いがけない時に来る。
- ②それゆえ、常に用心している必要がある。
- ③マタ 24:36

Mat 24:36 **ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。**

## II. 2種類のしもべのたとえ話（41～48節）

### 1. 41節

Luk 12:41 そこで、ペテロが言った。「主よ。このたとえを話されたのは私たちのためですか、皆のためですか。」

- (1) ペテロは、このたとえ話が誰に語られたものなのか、質問した。
  - ①「このたとえ話」とは、「忠実なしもべのたとえ話」である。
  - ②これは、弟子たちのためなのか、群衆のためなのか。
  - ③主人に給仕してもらえるしもべは、自分たちだけなのか、群衆も含むのか。
  - ④ペテロは、天的祝福に目が開かれつつある。
  - ⑤この質問がより重要なたとえ話を引き出す。

### 2. 42節

Luk 12:42 主は言われた。「では、主人によって、その家の召使いたちの上に任命され、食事時には彼らに決められた分を与える、忠実で賢い管理人とは、いったいどれでしょうか。」

- (1) イエスは、ペテロの質問には直接答えていない。
  - ①イエスの教えは続いているのである。
  - ②これ以降の教えは、ペテロが質問したこと以上の答えになっている。
- (2) イエスは、当時のイスラエルの指導者層を念頭において語る。
  - ①忠実なしもべと不忠実なしもべが受ける報酬は、異なる。
    - \* 忠実なしもべとは、イエスの弟子たちである。
    - \* 不忠実なしもべとは、パリサイ人や律法学者たちである。
  - ②主人は、忠実なしもべに大きな権限を与える。
    - \* 彼は、召使いたちの上に任命される。
    - \* 彼は、他の召使いに決められた分量の食事を与える。

### 3. 43～44節

Luk 12:43 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。

Luk 12:44 まことに、あなたがたに言います。主人はその人に自分の全財産を任せるようになります。

- (1) 主人がいない間も忠実に奉仕をしたしもべは、幸いです。
  - ①主人は、そのしもべに報賞を与える。
- (2) 「まことに、あなたがたに言います」

- ①主人は、忠実で賢い管理人(しもべ)に自分の全財産を任せるようになる。
- ②これは、より大きな権限を与えるという意味である。
- ③これは、御国(千年王国)で成就する祝福である。

#### 4. 45~46節

Luk 12:45 もし、そのしもべが心の中で、『主人の帰りは遅くなる』と思い、男女の召使いたちを打ちたたき、食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始めるなら、

Luk 12:46 そのしもべの主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ報いを与えます。

- (1) 不忠実なしもべは、不信者である。
  - ①しもべであるかのように振る舞っているが、彼は救われていない。
  - ②彼は、召使いたちに食事を与える代わりに、彼らを打ちたたく。
  - ③また、自己中心的に振る舞う(食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始める)。
  - ④これは、パリサイ人と律法学者の姿である。
- (2) 主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来る。
  - ①主人は、不忠実なしもべを厳しく罰する。
  - ②彼は、他の不忠実な者たちと同じ扱いを受ける。

#### 5. 47~48節

Luk 12:47 主人の思いを知りながら用意もせず、その思いどおりに働きもしなかったしもべは、むちでひどく打たれます。

Luk 12:48 しかし、主人の思いを知らずにいて、むち打たれるに値することをしたしもべは、少ししか打たれません。多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。

- (1) ここでは、奉仕に対する報賞には、段階があるという原則が教えられている。
  - ①信者の場合は、天において受ける報賞に段階がある。
  - ②不信者の場合は、地獄において受ける罰に段階がある。
- (2) 御心を知りながら、それを無視したしもべは、むちでひどく打たれる。
  - ①御心を知らなかった者は、少ししか打たれない。
- (3) 「多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます」(48節)。
  - ①これが、聖書的弟子道の原則である。

②ヤコ3:1

Jas 3:1 私の兄弟たち、多くの人が教師になってはいけません。あなたがたが知っているように、私たち教師は、より厳しいさばきを受けます。

③しかし、御心をより深く知ることを恐れてはならない。

④むしろ、より深く御心を知り、より忠実に歩むことを志すべきである。

## 結論

### 1. 再臨の約束

(1) ルカでは、弟子たちのもとを去り、再び戻って来るという予告は、ここが最初。

(2) マタ 24~25 章

(3) ヨハ 14:1~3

Joh 14:1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

Joh 14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。

Joh 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

### 2. メシア的王国(千年王国)の約束

(1) ギリシア人にとっては、神の国とは理想化された霊的王国である。

(2) ユダヤ人にとっては、神の国とは地上に成就する終末的王国である。

(3) 旧約時代の預言者たちは、メシアの到来と神の国の設立を預言した。

(4) 2つのたとえ話は、再臨と神の国の設立を前提に解釈する必要がある。

### 3. 忠実なしもべの使命

(1) 2ペテ 3:9

2Pe 3:9 主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

(2) 「主の日」(終末の出来事)は、遅れているわけではない。

(3) 1人でも多くの人が救われるように、神は忍耐しておられる。

(4) クリスチャンのゴールは、思い煩いのない生活ではない。

(5) 携挙、再臨、千年王国という終末時代の出来事を理解したなら、生活は変わる。

ルカの福音書 63回

苦難の日の予告

12：49～59

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②パリサイ人や律法学者によるイエスの拒否が、決定的になった。
- ③拒否という現実の中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。
- ④クリスチャンは、霊的戦いに巻き込まれているのである。

(2) ルカ 12：1～13：17 の内容

- ①恐れなき信仰告白（12：1～12）
- ②永遠の視点（12：13～21）
- ③神の備え（12：22～34）
- ④人の子の来臨（12：35～48）
- ⑤苦難の日の予告（12：49～59）
- ⑥悔い改めの勧め（13：1～9）
- ⑦教えの正しさを証明するしるし（13：10～17）

(3) 注目すべき点

- ①7つのポイントは、拒否の現実の中でいかに生きるべきかを教えたものである。
- ②前回の箇所（人の子の来臨）
  - \*来臨に備える重要性を教えるために、2つのたとえ話が語られた。
- ③今回の箇所（苦難の日の予告）
  - \*苦難の日がくることを前提に、忠実な弟子として生きる。

2. アウトライン

- (1) イエスをめぐる分裂（49～53節）
- (2) 時のしるし（54～56節）
- (3) 裁判の例話（57～59節）

3. 結論

- (1) 家族分裂の可能性
- (2) 時代の風についての無関心
- (3) 負債者の投獄

苦難の日に備えることの重要性について学ぶ。

## I. イエスをめぐる分裂 (49～53 節)

### 1. 49 節

**Luk 12:49 わたしは、地上に火を投げ込むために来ました。火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。**

- (1) イエスは依然として弟子たちに語っている。
  - ①ペテロの質問に対して、イエスは2つ目のたとえ話を語られた (41～42 節)。
  - ②この箇所は、その続きである。

### (2) 「わたしは、地上に火を投げ込むために来ました」

- ①イエスは、自らの奉仕の目的は地上に火を投げ込むことであると言われた。
- ②火には2つの象徴的意味がある。
  - \*清めと裁き
  - \*この文脈では、火は裁きの象徴である。

### ③ルカ 3 : 16

**Luk 3:16** そこでヨハネは皆に向かって言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。

- \*聖霊によるバプテスマは、聖霊による教会との一体化を指す。
- \*火によるバプテスマは、再臨のキリストによる裁きを指す。

- (3) イエスは、裁きのプロセスがすでに始まっていることを願われた。
  - ①なぜなら、裁きは神の民を清めるからである。
  - ②なぜなら、裁きは神の国の到来をもたらすからである。

### 2. 50 節

**Luk 12:50 わたしには受けるべきバプテスマがあります。それが成し遂げられるまで、わたしはどれほど苦しむことでしょう。**

- (1) しかし、裁きの奉仕の時はまだきていない。
  - ①その前に、イエス自身が裁きを通過する必要がある。
  - ②それは、罪人の罪を赦すために、神の怒りを一身に負うことである。
  - ③そのことを思うと、イエスの心は打ちひしがれる。
    - \*肉体の苦しみだけでなく、神との断絶からくる霊的苦しみがあつた。
  - ④受難は、イエスに与えられた使命である。

(2) イエスは、ご自身の受難を「バプテスマ」と表現された。

- ①水のバプテスマを受けた人は、次に水から上がる。
- ②これは、イエスの死と復活を象徴している。
- ③水のバプテスマを受けた人のように、イエスは死んで復活する。

(3) ヨハ3:17

Joh 3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

- ①初臨のメシアの使命は、世を裁くことではなく、世を救うことである。
- ②再臨のメシアの使命は、世を裁くことである。

### 3. 51節

Luk 12:51 あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思っていますか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ分裂です。

- (1) イエスは、地上に平和をもたらすだけでなく、分裂をもたらすために来られた。
  - ①イエスの公生涯によって、分裂が始まった。

### 3. 52～53節

Luk 12:52 今から後、一つの家の中で五人が二つに分かれ、三人が二人に、二人が三人に対立するようになります。

Luk 12:53 父は息子に、息子は父に対立し、母は娘に、娘は母に対立し、姑は嫁に、嫁は姑に対立して分かれるようになります。」

- (1) 分裂の例として、最も絆が強固な家族関係が取り上げられる。
  - ①5人家族が、2人と3人に分かれて、対立するようになる。
  - ②父と息子、母と娘、姑と嫁が対立して分かれるようになる。
- (2) 分裂の原因は、イエスに関する評価の違いである。
  - ①イエスはメシアなのか。
  - ②イエスの教えや奇跡は、信頼できるか。
  - ③イエスが原因となって起こる分裂状況は、今も続いている。
  - ④イエスの弟子が家族関係で苦しむのは、普通のことである。

## II. 時のしるし (54～56節)

### 1. 54～55節

Luk 12:54 イエスは群衆にもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言います。そしてそのとおりになります。

Luk 12:55 また南風が吹くと、『暑くなるぞ』と言います。そしてそのとおりになります。

(1) ここから群衆に対する教えに戻る。

①教えの中心は、時を見分けることの重要性である。

(2) 彼らは、自然界の風の読み方を知っていた。

①西に雲が出るのを見るとすぐに、「にわか雨になる」と言う。

\*地中海から雨雲が出ると、イスラエルの地に雨が降る。

\*風が西から東に吹く。

②南風が吹くと、「暑くなるぞ」と言う。

\*砂漠から吹く風は、熱風をもたらす。

\*3月に吹く風である。

## 2. 56節

Luk 12:56 偽善者たちよ。あなたがたは地と空の様子を見分けることを知っていながら、どうして今の時代を見分けようとししないのですか。

(1) しかし彼らは、時代の風を見分けることができない。

①彼らは、イエスが神の国をもたらすメシアとして来られたことを信じない。

(2) 彼らは、「偽善者たち」である。

①時代の風を見分ける能力がないということではない。

②彼らは、時代の風に無関心である。あるいは、見分けたくないのである。

③その結果、イスラエルの中に分裂が起こり、裁きが行われるようになる。

## III. 裁判の例話 (57～59節)

### 1. 57節

Luk 12:57 あなたがたは、何が正しいか、どうして自分で判断しないのですか。

(1) イエスは、手遅れになる前に忠実な弟子たちの群れに加わるように勧める。

①裁判の例話は、それを教えるために語られたものである。

②この例話は、判決が下る前に、紛争を解決せよという教えである。

### 2. 58～59節

Luk 12:58 あなたを訴える人と一緒に役人のところに行くときは、途中でその人と和解するように努めなさい。そうでないと、その人はあなたを裁判官のもとにひっぱって行き、裁判

官はあなたを看守に引き渡し、看守はあなたを牢に投げ込みます。

Luk 12:59 あなたに言います。最後のレプタを支払うまで、そこから出ることは決してできません。」

- (1) 法廷に出る前に、訴える人と和解するように努めるのは知恵である。
  - ① そうしないと、厳しい判決が下ることになる。
  - ② ローマ法により負債者として投獄されると、なかなか釈放されない。
- (2) 例話の意味
  - ① あなたを訴える人とは、イエスである。
  - ② 裁判官とは、父なる神である。
  - ③ 牢とは、地獄である。
  - ④ 教訓は、父なる神の裁きを受ける前に、イエスと和解せよということである。

## 結論

### 1. 家族分裂の可能性

- (1) イエスと福音のメッセージに関しては、信じるか信じないか、しかない。
- (2) 中間の道はない。
- (3) 弟子たちは、家族の分裂に直面しても、忠実であるようにと教えられた。
- (4) 今も、多くのクリスチャンがこの問題で苦しんでいる。
- (5) メシアニックジューの苦しみは、今も続いている。
- (6) イエスを知ることは、それほど価値があることである。

### 2. 時代の風に対する無関心

- (1) 当時の人口の約半数が、農夫であった。
- (2) 農業を営むためには、適量の光と、適量の雨を必要とした。
- (3) 彼らは、風を読み、翌日の天候を予想することができた。
- (4) しかし、時代の風を読むことに関しては、無関心であった。
- (5) イエスが行なっておられた「しるし」は、時代の風であった。
- (6) それを読むなら、メシア的王国が近いことが分かったはずである。
- (7) しかし彼らは、時代の風には無関心であった。
- (8) 今の時代の人々も同じである。
  - ① 為替、株価、経済指標には関心があるが、霊的事項については無関心である。
  - ② 今という時に良き決断をしなければ、取り返しのつかないことになる。

### 3. 負債者の投獄

- (1) 私たちは神の前では負債者である。
- (2) 神の裁きにより投獄される（地獄に投げ込まれる）運命にある。
- (3) 自分自身で負債を払うことは不可能である。
- (4) 神の裁きを受ける前に、神と和解する必要がある。
- (5) 和解する方法は、イエス・キリストを信じることである。
  - ①イエスは、私たちのために負債を払ってくださった。
  - ②1ヨハ2:2

1Jn 2:2 この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。

ルカの福音書 64回

悔い改めの勧め

13：1～9

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②パリサイ人や律法学者によるイエスの拒否が、決定的になった。
- ③拒否という現実の中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。
- ④クリスチャンは、霊的戦いに巻き込まれているのである。

(2) ルカ 12：1～13：17 の内容

- ①恐れなき信仰告白（12：1～12）
- ②永遠の視点（12：13～21）
- ③神の備え（12：22～34）
- ④人の子の来臨（12：35～48）
- ⑤苦難の日の予告（12：49～59）
- ⑥悔い改めの勧め（13：1～9）
- ⑦教えの正しさを証明するしるし（13：10～17）

(3) 注目すべき点

- ①7つのポイントは、拒否の現実の中でいかに生きるべきかを教えたものである。
- ②前回の箇所（苦難の日の予告）
  - \*神の裁きを下る前に、主イエスを通して神と和解するように。
- ③今回の箇所（悔い改めの勧め）
  - \*迫りくる裁きを前提に、悔い改めの勧めが語られる。

2. アウトライン

- (1) 悔い改めの必要性（1～5節）
- (2) いちじくの木のとえ話（6～9節）

3. 結論

- (1) 事故や悲劇的な死から学ぶべき教訓
- (2) いちじくのとえ話のイスラエルへの適用
- (3) いちじくのとえ話の個人的適用

悔い改めの勧めについて学ぶ。

## I. 悔い改めの必要性（1～5節）

### 1. 1節

**Luk 13:1 ちょうどそのとき、人々が何人かやって来て、ピラトがガリラヤ人たちの血を、ガリラヤ人たちが献げるいけにえに混ぜた、とイエスに報告した。**

(1) イエスが裁きについて語っていたちょうどそのとき、人々が何人かやって来た。

①彼らは、エルサレムで起こったある悲劇について、イエスに報告した。

②彼らは、イエスがピラトを糾弾してくれることを期待した。

(2) ユダヤ総督のピラトが、ガリラヤのユダヤ人たちを殺した。

①ガリラヤのユダヤ人たちは、神殿でいけにえを献げようとした。

\*恐らく、過越の祭りの期間であろう。

②ピラトは、神殿の内庭で彼らを殺した。

\*祭りの期間、ピラトはエルサレムに滞在していた。

\*ガリラヤ人たちは、反逆罪で殺された可能性がある。

\*この事件は、ピラトの残忍な性質と合致している。

③この事件により、いけにえの血とガリラヤ人たちの血が混ざった。

\*必ずしも血が混ざったと解釈しなくてもよい。比喩的表現の可能性はある。

④この出来事に関する記録は、聖書以外には残っていない。

\*したがって、書かれている以上のことは、分からない。

(3) イエスは、報告した人たちが期待したような反応は示さなかった。

①イエスは、ピラトの残忍な行為を糾弾しなかった。

②イエスは、この事件を悔い改めの重要性を教えるための例話とされた。

③前回の「苦難の日の予告」で取り上げたのと同じテーマが続いている。

\*神の裁きが下る前に、悔い改める必要がある。

### 2. 2～3節

**Luk 13:2 イエスは彼らに言われた。「そのガリラヤ人たちは、そのような災難にあったのだから、ほかのすべてのガリラヤ人よりも罪深い人たちだだと思いますか。」**

**Luk 13:3 そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」**

(1) 当時、多くのユダヤ人が、悲劇や事故は個人的な罪の結果であると考えていた。

①不幸の原因は、罪にあると考えるのは人間の常である。

②エルサレムのユダヤ人は、ガリラヤのユダヤ人に対して優越感を持っていた。

(2) イエスは、報告したユダヤ人たちの誤解を解いた。

- ① 災難に遭ったガリラヤ人たちが、他のガリラヤ人よりも罪深いわけではない。
- ② 悔い改めないなら、みな同じように滅びる。

### 3. 4～5節

**Luk 13:4 また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも多く、罪の負債があったと思いますか。**

**Luk 13:5 そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」**

(1) イエスは別の事件を取り上げ、悲劇は罪の結果であるという誤解を解く。

- ① シロアムの塔が倒れて、18人が死んだ。
- ② シロアムの池は、エルサレムの南東の端にあった。
- ③ この事件に関しても、ここに記されていること以外の情報はない。
- ④ 死んだ18人は、ローマによる水路工事に従事していた人たちであろう。

(2) 死んだ18人は、他のエルサレムの住民よりも罪深かったというわけではない。

- ① 誰であっても、悔い改めないなら、みな同じように滅びる。
- ② これは、イスラエル全体への警告である。
- ③ この警告は、紀元70年に現実のものとなる。

(3) 悔い改めの必要性を教えるために、1つのたとえ話が語られる。

- ① そのたとえ話の中には、神の恵みの要素が含まれている。

## II. いちじくの木のとえ話 (6～9節)

### 1. 6節

**Luk 13:6 イエスはこのようなたとえを話された。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。そして、実を探しに来たが、見つからなかった。」**

(1) このたとえ話を、別の「いちじくの話」と混同してはならない。

- ① イエスは、いちじくの木を呪われた (マタ 21:19)。
- ② イエスは、いちじくの木に関する短いたとえ話を語られた (マタ 24:32)。
- ③ このたとえ話は、イザヤ書5章1～7節 (ぶどう畑のとえ話) に似ている。

(2) このたとえ話の意味

- ① 神のぶどう園は、世界のことである。

- ②そこに植えられたいちじくの木は、イスラエルのことである。
- ③ぶどう園の主人は、神のことである。
- ④ぶどう園の番人は、主イエスのことである。

- (3) イエスは、個人に対してではなく、イスラエルに対して語っている。
- ①神は、イスラエルが悔い改めの実をつけることを期待した。
  - ②しかしイスラエルは、実をつけることがなかった。

## 2. 7節

Luk 13:7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年間、このいちじくの木に実を探しに来ているが、見つからない。だから、切り倒してしまいなさい。何のために土地まで無駄にしているのか。』

- (1) 主人は、ぶどう園の番人に言った。
- ①このいちじくの木には、3年間の猶予を与えた。
  - ②これは、実をつける時期になってから3年経ったということである。
  - ③しかし、実が見つからない。
  - ④このまま放置しては、土地が無駄になる。
  - ⑤この木を切り倒してしまえ。

## 3. 8～9節

Luk 13:8 番人は答えた。『ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥料をやってみます。』

Luk 13:9 それで来年、実を結ばばよいでしょう。それでもだめなら、切り倒してください。』

- (1) 番人の執りなし
- ①番人は、もう1年の猶予を与えてほしいと願った。
  - ②「もう1年ある」ではなく、「たった1年しかない」である。
  - ③つまり、緊急に悔い改めが必要であることを教えている。
- (2) イスラエルには十分な神の恵みが与えられた。
- ①番人は、イスラエルという木の周りを掘って、肥料をやった。
  - ②それでも、その木は実を結ばなかった。
  - ③その結果、イスラエルという木は、切り倒された。

\*紀元70年のエルサレムの崩壊

## 結論

### 1. 事故や悲劇的な死から学ぶべき教訓

- (1) 事故や悲劇的な死は、その人の罪深さを示すバロメーターではない。
- (2) ヨハ9：1～3

Joh 9:1 さて、イエスは通りすがりに、生まれたときから目の見えない人をご覧になった。

Joh 9:2 弟子たちはイエスに尋ねた。「先生。この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか。」

Joh 9:3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。

- (3) イエスは、なぜ悲劇に遭う人とそうでない人がいるのかは、説明していない。
- (4) すべての人は、やがて死ぬ。
- (5) 悔い改めないなら、死後に厳しい裁きに遭う。
- (6) 死は、すべての終わりではない。
- (7) ヨハ3：16

Joh 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

### 2. いちじくのたとえ話のイスラエルへの適用

- (1) イスラエルは、実をつけないいちじくの木のようなものである。
- (2) 外面はいのちがあるように見えているが、実をつけることはない。
- (3) バプテスマのヨハネは、木の根元に斧を置いた（ルカ3：9）。

Luk 3:9 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」

- (4) イエスはイスラエルのために3年間奉仕をしたが、実は結ばれなかった。
- (5) 神はイスラエルをただちに滅ぼすことができたが、さらに忍耐された。
- (6) 紀元70年、神はローマ軍がエルサレムと神殿を破壊することを赦された。

### 3. いちじくのたとえ話の個人的適用

- (1) 悲劇が起きたとき、なぜあの人は死んだのかと問うべきではない。
- (2) むしろ、なぜ私が生かされているのかと問うべきである。
- (3) 神は、私たちが神の栄光を現すことを期待しておられる。
- (4) 長寿は、人生のゴールではない。
- (5) 生かされている間に、悔い改めの実を結ぶことが人生のゴールである。

ルカの福音書 65回  
教えの正しさを証明するしるし  
13：10～17

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②パリサイ人や律法学者によるイエスの拒否が、決定的になった。
- ③拒否という現実の中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。
- ④クリスチャンは、霊的戦いに巻き込まれているのである。

(2) ルカ 12：1～13：17 の内容

- ①恐れなき信仰告白（12：1～12）
- ②永遠の視点（12：13～21）
- ③神の備え（12：22～34）
- ④人の子の来臨（12：35～48）
- ⑤苦難の日の予告（12：49～59）
- ⑥悔い改めの勧め（13：1～9）
- ⑦教えの正しさを証明するしるし（13：10～17）

(3) 注目すべき点

- ①7つのポイントは、拒否の現実の中でいかに生きるべきかを教えたものである。
- ②前回の箇所（悔い改めの勧め）
  - \*迫りくる裁きを前提に、悔い改めの勧めが語られる。
  - \*イスラエルという木は、実をつける必要がある。
- ③今回の箇所（教えの正しさを証明するしるし）
  - \*イエスはメシアであり、その教えは真実である。
  - \*イエスは、イスラエルを回復することができる。

2. アウトライン

- (1) 病の霊につかれた女の癒やし（10～13節）
- (2) 会堂司の憤り（14節）
- (3) イエスの教え（15～16節）
- (4) 2種類の応答（17節）

3. 結論：ルカ 12：1～13：17 の復習

教えの正しさを証明するしるしについて学ぶ。

## I. 病の霊につかれた女の癒やし (10~13節)

### 1. 10節

**Luk 13:10 イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。**

(1) 公生涯の前半では、安息日ごとに会堂で教えたと思われる。

①ルカ 4:15

**Luk 4:15 イエスは彼らの会堂で教え、すべての人に称賛された。**

②ルカ 4:16

**Luk 4:16** それからイエスはご自分が育ったナザレに行き、いつもしているとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた。

③ルカ 4:31

**Luk 4:31** それからイエスは、ガリラヤの町カペナウムに下られた。そして安息日には人々を教えておられた。

④ルカ 6:6

**Luk 6:6** 別の安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに右手の萎えた人がいた。

(2) ルカの福音書では、イエスが会堂で教えるのはこれが最後である。

①当時は、巡回ラビは、会堂での説教を依頼された。

②イエスは、次第に会堂から排除されるようになった。

③エルサレムに近づくにつれて、イエスに対する敵対心が強くなった。

### 2. 11節

**Luk 13:11** すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全く伸ばすことができない女の人があった。

(1) イエスは、教えている途中で、この女の人存在に気づいたと思われる。

①訳文の比較 (kai idou) (and behold)

\* 「すると」(新改訳 2017)

\* 訳していない。(新共同訳)(口語訳)

\* 「視よ」(文語訳)

(2) 病状と病の期間を示すのは、医者ルカの特長である。

①18年も病の霊につかれていた。

②腰が曲がって、全く伸ばすことができなかった。

\*なんらかの脊椎の病気であろう。

\*痛みや不快感がある。歩こうとすると病状が悪化する。

③これらの情報は、イエスによる癒やしの素晴らしさを浮き彫りにする。

(3) ルカは、この病の原因は悪霊にあると見抜いている。

①ここでの癒やしには2面性がある。

②悪霊の追い出しと肉体的癒やし

(4) 悪霊に対する対処法

①悪霊の存在を否定するのは、誤りである。

②悪霊を過大評価することや悪霊について過剰な興味を持つことは、誤りである。

### 3. 12～13節

**Luk 13:12 イエスは彼女を見ると、呼び寄せて、「女の方、あなたは病から解放されました」と言われた。**

**Luk 13:13 そして手を置かれると、彼女はただちに腰が伸びて、神をあがめた。**

(1) 癒やしの方法

①イエスは、彼女を自分のほうに呼び寄せた。

\*そこにいた人たちが目撃できるように。

②イエスは、ことばで彼女を癒やした。

\*イエスのことばには、力がある。

\*「解放された」は、脊椎の病が癒やされた場合に使われていたことば。

\*と同時に、悪霊の支配からの解放を意味することばでもあった。

③イエスは、手を置かれた。

\*あわれみの心を示すためである。

\*また、癒やしの力がイエスから出たことを可視化するためである。

(2) 癒やしの結果

①彼女は、ただちに腰が伸びた。

\*痛みを感じないで立ち上がることができた。

\*昔のように、普通に歩くことができた。

②彼女は、神をあがめた。

\*イエスが祝福を届ける神の器であることを認識した。

\*「神をあがめ続けた」。当然の反応である。

## II. 会堂司の憤り (14節)

### 1. 14節

Luk 13:14 **すると、会堂司はイエスが安息日に癒やしを行ったことに憤って、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。だから、その間に来て治してもらいなさい。安息日にはいけない。」**

(1) この女の人と会堂司の反応は、対照的であった。

- ①この女の方は、神をあがめた。
- ②会堂司は、間接的に彼女とイエスを批判した。
- ③彼は、群衆に向かって言った。

(2) 会堂司の議論は論理的に聞こえる。

- ①安息日に働くのは律法違反である。
- ②働くべき日は6日ある。
- ③癒やしてほしいなら、その間に来て治してもらえばよい。

(3) 会堂司の議論の問題点

- ①人間の苦しみよりも、安息日を守ることにより大きな関心がある。
- ②癒やしは労働に当たると解釈していた (医者の仕事)。
- ③安息日の労働禁止令は、神には適用されないことを知らなかった。
- ④群衆への助言の内容は、人々を神の国から遠ざけるものであった (11:52)。

Luk 11:52 **わざわざだ、律法の専門家たち。おまえたちは知識の鍵を取り上げて、自分はずらず、入ろうとする人々を妨げたのだ。」**

## III. イエスの教え (15~16節)

### 1. 15節

Luk 13:15 **しかし、主は彼に答えられた。「偽善者たち。あなたがたはそれぞれ、安息日に、自分の牛やろばを飼葉桶からほどもき、連れて行って水を飲ませるではありませんか。」**

(1) イエスはこの機会を捉えて、霊的教訓を教える。

- ①イエスは、「偽善者たち」と言われた。
- ②会堂司と宗教的指導者たちのことである。
- ③彼らは未信者であり、神のことばの真の意味を理解していない。
- ④しかし、真理を理解しているかのように振る舞っている。
- ⑤また、敬虔そうに振る舞っている。
- ⑥それゆえ、彼らは偽善者たちである。

(2) 小から大の議論

- ①安息日であっても、家畜の世話はするではないか。
- ②人は、家畜以上に価値がある。
- ③それゆえ、安息日に人を癒やすのは当然のことである。

2. 16節

**Luk 13:16 この人はアブラハムの娘です。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日に、この束縛を解いてやるべきではありませんか。」**

(1) 「この人はアブラハムの娘です」

- ①ユダヤ人は、女性を男性よりも価値が低いと考えていた。
- ②イエスは、彼女を「アブラハムの娘」と呼んだ。
  - \*これは、荣誉あるタイトルである。
  - \*ユダヤ人たちは、彼女に対してこの呼び名を使わなかったと思われる。
  - \*病を患っているのは、彼女に何か問題があるからだと考えていた。
- ③このタイトルを「アブラハムと同じ信仰を持つ者」と解釈することも可能。

(2) イエスのあわれみの心

- ①安息日が明けるのを待って癒やしを行なうなら、誰もイエスを批判しない。
- ②しかしイエスは、この女の人が1日でも多く苦しむことを拒否された。
- ③彼女は、18年間サタンに縛られていた。
- ④安息日は、解放を祝う日なので、この日に解放のわざを行なうのは当然である。

**IV. 2種類の応答 (17節)**

1. 17節

**Luk 13:17 イエスがこう話されると、反対していた者たちはみな恥じ入り、群衆はみな、イエスがなされたすべての輝かしいみわざを喜んだ。**

(1) 「反対していた者たちは、みな恥じ入り、」

- ①「恥じ入る」とは、ひどく恥ずかしいと思うことである。
  - \*通常、相手に対して申し訳ないと思う感情や、反省の思いが含まれている。
- ②この訳語は、誤解を生みやすい。
- ③これは、「They were ashamed.」ではなく「They were put to shame.」である。
  - \*彼らは、辱めを受けたということである。「面子をつぶされた」。
  - \*これは、怒りの感情が伴った心の動きである。

(2) 群衆はみな、喜んだ。

- ①指導者たちの反対にもかかわらず、イエスは輝かしい御業を行なわれた。
- ②イエスの教えは、群衆の痛みに寄り添ったものであった。

結論：ルカ 12：1～13：17 の復習

1. 一連の教えは、拒否の現実を前提にして語られたものである。

- (1) 主イエスは、宗教的指導者たちから拒否された。
- (2) 弟子たちも同じ体験をするようになる。
- (3) 信者は霊的戦いに巻き込まれている。

2. 一連の教えは、テーマの流れに即して語られた。

- (1) イエスの弟子としての心構え
  - ①恐れなき信仰告白
  - ②永遠の視点
- (2) イエスの弟子としての責務
  - ③神の備え
  - ④再臨とメシア的王国
  - ⑤人の子の来臨
  - ⑥苦難の日の予告
  - ⑦悔い改めの勧め
- (4) 18年間苦しんだ女の人の癒やし
  - ⑦教えの正しさを証明するしるし

3. この病の癒やしには、象徴的な意味がある。

- (1) この女の人の状態は、イスラエルの霊的状态を暗示している。
  - ①ルカ 4：18～19

Luk 4:18 「主の霊がわたしの上にある。／貧しい人に良い知らせを伝えるため、／主はわたしに油を注ぎ、／わたしを遣わされた。／捕らわれ人には解放を、／目の見えない人には目の開かれることを告げ、／虐げられている人を自由の身とし、

Luk 4:19 主の恵みの年を告げるために。」

- (2) この女の人の癒やしは、イエスの権威を証明している。
  - ①イエスには、イスラエルを束縛から解放する力と権威がある。
  - (3) この癒やしは、イスラエルが解放される方法を暗示している。
    - ①イエスのもとに近づく。
    - ②イエスのことばを、そのまま受け取る。
  - (4) この癒やしの原則は、すべての人に適用することができる。

ルカの福音書 66回

神の国のたとえ話

13：18～21

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②イエスは、拒否という現実の中で、弟子としていかに生きるべきかを教えた。
- ③この箇所から、弟子訓練のテーマが「神の国に関する教え」に変わる。

(2) ルカ 13：18～14：35 の内容

- ①神の国のたとえ話（13：18～21）
- ②神の国への入国（13：22～30）
- ③神の国の延期（13：31～35）
- ④食卓での諸々の教え（14：1～24）
- ⑤弟子の代価（14：25～35）

(3) 注目すべき点

- ①5つのポイントは、すべて神の国に関連した教えである。
- ②しるしを目撃した群衆は、神の国がすぐに到来することを期待した。
- ③しかし、指導者たちがメシアを拒否したので、神の国は延期された。
- ④イエスは、メシア拒否と再臨の間の期間に起こることについて話された。

2. アウトライン

- (1) 神の国というテーマの紹介（18節）
- (2) からし種のたとえ話（19節）
- (3) パン種のたとえ話（20～21節）

3. 結論

- (1) からし種のたとえ話の現代的適用
- (2) パン種のたとえ話の現代的適用

神の国についての2つのたとえ話について学ぶ。

I. 神の国というテーマの紹介（18節）

1. 18節

Luk 13:18 そこで、イエスはこう言われた。「神の国は何に似ているでしょうか。何にたとえ

たらよいでしょうか。

(1) 「そこで」(therefore) という接続詞が書かれている。

①これは、前述の事項を受けて、次の事項につなげるための接続詞である。

②前述の事項とは、群衆がイエスの御業を喜んだことである(17節)。

Luk 13:17 イエスがこう話されると、反対していた者たちはみな恥じ入り、群衆はみな、イエスがなされたすべての輝かしいみわざを喜んだ。

③つまり群衆は、神の国が近いと感じたのである。

④そこでイエスは、群衆の誤解を解くために、神の国のテーマを取り上げた。

(2) 神の国についての2つのたとえ話

①2つのたとえ話を積極的に解釈する学者がいる。

\* 神の国には生命力がある。

\* 最初は小さな始まりであるが、やがて大きな存在となる。

\* 筆者も、かつてはそういう理解をしていたことがある。

②2つのたとえ話を消極的に解釈する学者がいる。

\* メシア拒否と再臨の間の期間におけるキリスト教界の状況の描写である。

\* 現在筆者は、この立場に立っている。

(3) マタイの福音書13章との関連

①マタ13章には、神の国についてのたとえ話が多数出てくる。

②からし種とパン種のたとえ話(マタ13:31~33)

③マタ13:11

Mat 13:11 イエスは答えられた。「あなたがたには天の御国の奥義を知ることが許されていますが、あの人たちには許されていません。」

④この聖句から、「奥義としての神の国」という名称が生まれた。

\* 「奥義」とは、新約時代になってから初めて啓示された真理である。

⑤2つのたとえ話は、キリスト教界がどのように発展するかを預言したもの。

⑥奥義としての王国=キリスト教界

⑦奥義としての王国は、真の信者と見かけだけの信者を含む。

⑧再臨の前に、キリスト教界内に悪の影響が広がることが預言された。

## II. からし種のたとえ話(19節)

### 1. 19節

Luk 13:19 それはからし種に似ています。ある人がそれを取って自分の庭に蒔くと、生長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。」

(1) 「それはからし種に似ています」

- ① 「からし種」がなんであるか、学者の間に論争がある。
- ② 恐らく「黒胡椒」であろう。
- ③ イエス時代、最も小さな種として知られていた。
  - \* からし種 1 グラムの中に 725～760 粒の種がある。
- ④ 胡椒は調味料として、また油を搾る種として珍重された。
- ⑤ 「奥義としての王国」の始まりは、実に小さなものである。
  - \* イエスの弟子たちは、少数であった。
  - \* イエスの教えは、この世の価値観とは正反対のものであった。

(2) 「ある人がそれを取って自分の庭に蒔くと、生長して木になり、」

- ① からし種は、木ではない。
- ② マタイの福音書 13 章 32 節では、「野菜」と訳されている。
- ③ ギリシア語では「ラカノン」である。灌木、ハーブ。
- ④ 木ではないが、木のように枝を張る一年生植物である。
  - \* パレスチナでは、3.5～4.5 メートルにもなるものがある。

(3) 「空の鳥が枝に巣を作りました」

- ① 野生の鳥がその枝に宿るようになった。
- ② 種蒔く人のたとえ話が、それ以外のたとえ話を解釈する基準である。
- ③ 空の鳥（複数形）は、サタンや悪霊の象徴である。
- ④ 巨大化したキリスト教界は、悪霊の影響を受けるようになる。

### Ⅲ. パン種のたとえ話 (20～21 節)

1. 20～21 節

Luk 13:20 再びイエスは言われた。「神の国を何にたとえたらよいでしょうか。

Luk 13:21 それはパン種に似ています。女の人がそれを取って三サトンの粉に混ぜると、全体がふくらみました。」

(1) 「女の人が」

- ① 女ということばは、宗教的意味を含んでいる。
- ② 良い意味での象徴
  - \* イスラエルは、「ヤハウエの妻」である。
  - \* 教会は、「キリストの花嫁」である。
- ③ 悪い意味での象徴
  - \* 黙 2 : 20

Rev 2:20 けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは、あの女、イゼベルをなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。

\*黙 17 : 1~2

Rev 17:1 また、七つの鉢を持つ七人の御使いの一人が来て、私に語りかけた。「ここに来なさい。大水の上に座している大淫婦に対するさばきを見せましょう。

Rev 17:2 地の王たちは、この女と淫らなことを行い、地に住む人々は、この女の淫行のぶどう酒に酔いました。」

\*統一化された偽の教会

(2) パン種ということばは、罪や偽りの教理を象徴している。

- ①種なしパンの祭りでは、7日間パン種を家から取り除く（出 12 : 15）。
- ②ユダヤ人たちは、その意味を理解した。違反者は共同体から追放された。
- ③マタ 16 : 6

Mat 16:6 イエスは彼らに言われた。「パリサイ人たちやサドカイ人たちのパン種に、くれぐれも用心しなさい。」

④マタ 16 : 12

Mat 16:12 そのとき彼らは、用心するようにとイエスが言われたのはパン種ではなく、パリサイ人たちやサドカイ人たちの教えであることを悟った。

⑤1 コリ 5 : 8

1Co 5:8 ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。

⑥ガラ 5 : 9

Gal 5:9 わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませるのです。

(3) 「混ぜると」という動詞

- ①ギリシア語で「エンクルプトウ」。隠す、しのばせるという意味。
- ②英語では、「hide」と訳されている。

(4) このたとえ話の背景

- ①ローマの町々には、パン屋があった。
- ②ガリラヤ地方では、婦人が家でパンを焼いた。
- ③1 サトンは約 14 リットル。3 サトンは約 42 リットル。
- ④ひとりの婦人が捏ねる最大量である。
- ⑤これでパンを焼くと、約 100 人が食べられる。

(5) このたとえ話の意味

- ①偽りの教えが「奥義としての王国」にこっそりと入り込む。
- ②その結果、キリスト教界全体が影響を受ける。

## 結論

### 1. からし種のたとえ話の現代的適用

- (1) からし種は、奥義としての王国（キリスト教界）の象徴である。
- (2) からし種は、灌木ではなく、巨大な木になってしまった。
- (3) キリスト教界には、多くの教派・教団や団体が存在するようになった。
- (4) キリスト教界（地域教会）には、真の信者と偽の信者が含まれている。
- (5) 空の鳥とは、福音の真理を否定するカルトや異端である。
  - ①モルモン教（末日聖徒イエス・キリスト教会）
  - ②エホバの証人（ものみの塔聖書冊子協会）
  - ③統一協会（世界平和統一家庭連合）
- (6) 私たちは、木の枝に巣を作る空の鳥を見分ける必要がある。
- (7) そのために必要なのが、聖書研究である。

### 2. パン種のたとえ話の現代的適用

- (1) 「パン種」は、新約聖書に23回出てくるが、すべて否定的な意味である。
- (2) パン種は福音のことではない。
- (3) 神の国は、福音の広がりによってではなく、メシアの再臨によって成就する。
- (4) 偽りの教えが混ぜられた結果、キリスト教界が3分割された。
  - ①ローマ・カトリック教会
  - ②東方正教会
  - ③プロテスタント教会
- (5) 3分割された教会は、それぞれ程度の差こそあれ、偽りの教えを内包している。
- (6) 今も、パン種は粉全体をふくらませている。
  - ①「真理は時代とともに変化する」
  - ②「聖書は時代とともに再解釈する必要がある」

ルカの福音書 67回

神の国への入国

13：22～30

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ13：18から、中心テーマが「神の国」に変わった。
- ③神の国とは、メシア的王国（千年王国）のことである。

(2) ルカ13：18～14：35の内容

- ①神の国のたとえ話（13：18～21）
- ②神の国への入国（13：22～30）
- ③神の国の延期（13：31～35）
- ④食卓での諸々の教え（14：1～24）
- ⑤弟子の代価（14：25～35）

(3) 注目すべき点

- ①5つのポイントは、すべて神の国に関連した教えである。
- ②しるしを目撃した群衆は、神の国がすぐに到来することを期待した。
- ③しかし、指導者たちがメシアを拒否したので、神の国は延期された。
- ④イエスは、メシア拒否と再臨の間の期間に起こることについて話された。

2. アウトライン

- (1) ある人の質問（22～23節 a）
- (2) 狭い門（23b～24節）
- (3) 家の主人（25～27節）
- (4) 教えの適用（28～30節）

3. 結論

- (1) 2つの門
- (2) 緊急性の認識

神の国に入国するための条件について学ぶ。

I. ある人の質問（22～23節 a）

1. 22節

**Luk 13:22 イエスは町や村を通りながら教え、エルサレムへの旅を続けておられた。**

- (1) エルサレムに向けたイエスの旅が続いている。
  - ①地理的情報は、話題が次に移ったことを示している。
    - \*使徒の働きでは、この手法が多用されている。
  - ②地理的情報は、旅のゴールがエルサレムであることを思い出させている。
    - \*イエスは十字架に向かって進んでいる。
    - \*しかしイエスは、時間を取って弟子訓練を行っておられる。
  
- (2) 「狭い門」や「家の主人」の教えは、他の福音書にも出てくる。
  - ①ルカは、それらの話を異なった文脈で紹介している。
  - ②これは、イエスが同じ話を何度もされたことを示している。
  - ③イエスの奉仕は、基本的には巡回伝道であった。

2. 23節 a

**Luk 13:23a すると、ある人が言った。「主よ、救われる人は少ないのですか。」**

- (1) これは、直前に出てきた神の国に関する教えを受けた質問である。
  - ①「からし種のたとえ」と「パン種のたとえ」は、期待外れの内容であった。
  - ②そこで、「救われる人は少ないのですか」という質問になった。
  - ③ユダヤ人にとっては、「救われる」とは神の国（メシア的王国）に入ること。
  
- (2) 質問者が誰かは分からない。
  - ①弟子の1人か、群衆の1人か。
  - ②質問者が誰かよりも、質問内容のほうが重要である。
  - ③イエスは、いつものように、質問を好機と捉えて、重要な真理を教える。

**II. 狭い門 (23b～24節)**

1. 23b～24節

**Luk 13:23b イエスは人々に言われた。**

**Luk 13:24 「狭い門から入るように努めなさい。あなたがたに言いますが、多くの人が、入ろうとしても入れなくなるからです。」**

- (1) 「救われる人は少ないのですか」という質問は、興味本位の質問である。
  - ①イエスは、その質問に直接的には答えなかった。
  - ②自分の救いと無関係な質問をする人は多いが、救いとは無関係である。
  - ③イエスは、どうすれば神の国に入ることができるかを教えた。

- (2) 狭い門とは、イエスの教えのことである。
  - ①これは、評判の良くない道である。
  - ②これは、入ることの決断が難しい門である。
  
- (3) 広い門とは、霊的指導者たちの教えのことである。
  - ①これは、広く受け入れられている道である。
  - ②これは、入ることの決断が容易な門である。
  
- (4) 「狭い門から入るように努めなさい」
  - ①イエスの教えは、にわかには信じられなくても、信じるべきである。
  - ②イエスの教えは、迫害に遭う可能性があっても、信じるべきである。
  - ③自力救済を教えているのではない。
  - ④「イエスの主権に従うこと」（ロードシップ論）を教えているのでもない。
  - ⑤救いの条件は、信仰だけである。
  
- (5) 多くの人が、狭い門ではない門から入ろうとしていた。
  - ①しかし彼らは、神の国に入ることができない。
  - ②このことを説明するために、「家の主人」の話が語られる。

### Ⅲ. 家の主人 (25～27 節)

#### 1. 25 節

Luk 13:25 家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってから、あなたがたが外に立って戸をたたき始め、『ご主人様、開けてください』と言っても、主人は、『おまえたちがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。

- (1) ここでは、神の国が宴会にたとえられている。
  - ①宴会が始まった。つまり、神の国が始まった。
  - ②主人は、戸を閉めた。つまり、神の国に入る可能性が閉ざされた。
    - \*主人は、主イエス自身である（マタ7:22～23）。
  - ③中に入れなかった者たちは、外に立って戸をたたき始めた。
    - \*彼らは、イスラエルの民である。
  - ④主人は、「おまえたちがどこの者か、私は知らない」と答えた。
    - \*イエスは信仰のない者たちに対して、彼らを知らないと言われる。

#### 2. 26 節

Luk 13:26 すると、あなたがたはこう言い始めるでしょう。『私たちは、あなたの前で食べ

たり飲んだりいたしました。また、あなたは私たちの大通りでお教えてくださいました。』

- (1) 彼らは、主人と親密な関係を持っていたことをアピールした。
  - ①ともに食べたり飲んだりした。
  - ②大通りで教えてもらった。

### 3. 27 節

Luk 13:27 しかし、主人はあなたがたに言います。『おまえたちがどこの者か、私は知らない。不義を行う者たち、みな私から離れて行け。』

- (1) 主人は、これらのアピールを一蹴した。
  - ①これらのことは、見せかけの関係である。
  - ②口先だけの信仰では、救われない。
  - ③聖書を知っているだけでは、救われない。
  - ④イエスに関する知識があるだけでは、救われない。

- (2) 主人は、厳しいことばを発した。
  - ①「おまえたちがどこの者か、私は知らない」
    - \*イエスのことばを信じない者は、イエスに知られていない。
  - ②「不義を行う者たち、みな私から離れて行け」
    - \*信仰がないなら、その人は「不義を行う者」である。
    - \*罪人は、イエスに近づくことができない。

## IV. 教えの適用 (28～30 節)

### 1. 28 節

Luk 13:28 あなたがたは、アブラハムやイサクやヤコブ、またすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分たちは外に放り出されているのを知って、そこで泣いて歯ざしりするのです。

- (1) 神の国に入っている人たち
  - ①族長たち（アブラハム、イサク、ヤコブ）
  - ②すべての預言者たち
  - ③彼ら全員が、信仰によって神の国に入っている。
  - ④旧約時代の聖徒たちは、復活のからだで神の国に入る。
- (2) 自分たちは外に放り出されているのを知って、イスラエルの民は、後悔する。
  - ①泣いて歯ざしりする。
  - ②これは、地獄を描写することばである。

## 2. 29節

**Luk 13:29** 人々が東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きま  
す。

(1) 異邦人の救いが預言される。

①旧約聖書は、異邦人の救いを預言している。

②イザ 25 : 6~7

Isa 25:6 万軍の【主】は、この山の上で万民のために、／脂の多い肉の宴会、良いぶどう酒  
の宴会、／髓の多い脂身と／よくこされたぶどう酒の宴会を開かれる。

Isa 25:7 この山の上で、／万民の上をおおうペールを、／万国の上にかぶさる覆いを取り除  
き、

③「人々が東からも西からも、また南からも北からも来て、」

\*これは、異邦人のことである。

③「神の国で食卓に着きます」

\*これは、メシア的王国の始まりに開かれる宴会のことである。

④異邦人の救いは、ルカにとっては重要なテーマである。

\*使徒の働きを中心テーマは、異邦人世界への福音の広がりである。

## 3. 30節

**Luk 13:30** いいですか、後にいる者が先になり、先にいる者が後になるのです。」

(1) 後にいる者とは、異邦人である。

①ユダヤ人たちは、自分たちは異邦人よりもすぐれていると思っていた。

②その異邦人が先になる。

(2) 先にいる者とは、ユダヤ人である。

①そのユダヤ人が後になる。

## 結論

### 1. 2つの門

(1) 狭い門

①これは、イエスのことばを信じて神の国に入る門である。

②この門から入る人は、祝福を受ける。

③信仰のある異邦人たちが、神の国で食卓に着くようになる。

④異邦人たちは、アブラハム、イサク、ヤコブとともに食卓に着く。

(2) 広い門

- ①自分たちはアブラハムの子孫であると考えてるのは、広い門である。
- ②広い門から入る者は、神の国の祝福に与ることができない。
- ③彼らは、「泣いて歯ぎしりする」。
- ④これは、地獄で経験する永遠の刑罰である。
  - \*「泣いて」は、悲しみを表現している。
  - \*「歯ぎしり」は、怒りと憎しみを表現している。
- ⑤神の国にいる人たちを見て、外にいる人たちは、悲しみと怒りを経験する。
- ⑥私たちへの教訓
  - \*死後に悔い改める可能性はない。
  - \*地獄は実際に存在する。

## 2. 緊急性の認識

### (1) 個人的終末論の視点から

- ①生きている限り、イエスを信じることは可能である。
- ②しかし、年を取れば取るほど、信じるのが難しくなる。
- ③また、先延ばしにすればするほど、信じるのが難しくなる。
- ④「今決心しなくてもよい」という考えは、危険である。

### (2) 聖書的終末論の視点から

- ①メシアの再臨と神の国の設立は、間近に迫っている。
- ②神の国が始まれば、未信者が心を変えて救われることは不可能になる。
- ③手遅れになる前に、イエスを信じる決心をする必要がある。
- ④神の国の扉は、永遠に開いているわけではない。

ルカの福音書 68回

神の国の延期

13：31～35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ13：18から、中心テーマが「神の国」に変わった。
- ③神の国とは、メシア的王国（千年王国）のことである。

(2) ルカ13：18～14：35の内容

- ①神の国のたとえ話（13：18～21）
- ②神の国への入国（13：22～30）
- ③神の国の延期（13：31～35）
- ④食卓での諸々の教え（14：1～24）
- ⑤弟子の代価（14：25～35）

(3) 注目すべき点

- ①5つのポイントは、すべて神の国に関連した教えである。
- ②群衆は、神の国がすぐにでも到来すると思った。
- ③しかし、指導者たちがメシアを拒否したので、神の国は延期された。
- ④イエスは、メシア拒否と再臨の間の期間に起こることについて話された。

2. アウトライン

- (1) パリサイ人たちの助言（31節）
- (2) イエスの決意（32～33節）
- (3) イエスの嘆き（34～35節）

3. 結論

- (1) めんどりの翼の下
- (2) 再臨のタイミング

神の国の延期について学ぶ。

I. パリサイ人たちの助言（31節）

1. 31節

Luk 13:31 ちょうどそのとき、パリサイ人たちが何人か近寄って来て、イエスに言った。「こ

**ここから立ち去りなさい。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」**

(1) 「ちょうどそのとき」

①文脈を意識する必要がある。

\*パリサイ人たちは、イエスの教えを聴いていた。

②イエスの教えのテーマは、「神の国への入国」であった。

\*内容は「ユダヤ人は排除され、異邦人は入国が許可される」であった。

③この教えを聴いて、パリサイ人たちは、憤りを覚えたはずである。

\*ルカは一貫して、パリサイ人たちを敵対者として描いている。

④彼らの忠告には隠された意図があった。

\*これは、イエスを排除するための新しい戦略である。

(2) 「ここから立ち去りなさい。ヘロデがあなたを殺そうとしています」

①ヘロデとは、ヘロデ・アンティパスのことである。

\*ヘロデは、ガリラヤの領主（国主）である。

②当時イエスは、ガリラヤの域内にいた。

\*つまり、ヘロデの統治下にあったということである。

③忠告内容は、ガリラヤから早く立ち去るべきであるということである。

\*これは、バプテスマのヨハネの二の舞になるという警告である。

④つまり、一刻も早くエルサレムに行けという忠告である。

\*ヘロデは、イエスがガリラヤの民衆の間で人気があるのを恐れていた。

\*彼は、バプテスマのヨハネのような事件をくり返したくないと思っていた。

\*イエスのことを、復活したバプテスマのヨハネかもしれないと考えていた。

\*エルサレムに行けば、すぐに逮捕されるに違いないと思っていた。

(3) ヘロデは本当にイエスを殺そうとしていたのか。

①ルカ 9：9

Luk 9:9 ヘロデは言った。「ヨハネは私が首をはねた。このよううわさがあるこの人は、いったいだれなのだろうか。」ヘロデはイエスに会ってみたいと思った。

②ルカ 23：8

Luk 23:8 ヘロデはイエスを見ると、非常に喜んだ。イエスのことを聞いていて、ずっと前から会いたいと思い、またイエスが行うしるしを何か見たいと望んでいたからである。

③ルカ 23：11

Luk 23:11 ヘロデもまた、自分の兵士たちと一緒にイエスを侮辱したり、からかったりしてから、はでな衣を着せてピラトに送り返した。

④以上の聖句から、パリサイ人たちはヘロデの敵意を誇張していたことが分かる。

(4) この機会を利用して、イエスは重要な真理を教える。

- ①ご自身の奉仕のゴール
- ②エルサレム崩壊の預言
- ③メシアの再臨

## II. イエスの決意 (32～33 節)

### 1. 32 節

Luk 13:32 イエスは彼らに言われた。「行って、あの狐にこう言いなさい。『見なさい。わたしは今日と明日、悪霊どもを追い出し、癒やしを行い、三日目に働きを完了する。』」

(1) イエスは、これがヘロデの陰謀であることに気づいた。

- ①イエスは、パリサイ人たちがヘロデの使いであることを見抜いた。
- ②そこで、彼らをヘロデのもとに送り返すことにした。

(2) 「行って、あの狐にこう言いなさい」

- ①ヘロデは狐のような人物である。
- ②これは悪口ではなく、事実である。

\* 狐は、狡猾で臆病な動物である。

\* 狐は、危険な動物である。隙があれば、めんどりを襲う。

\* 雅 2 : 15

Son 2:15 私たちのために、／あなたがたは狐を捕らえてください。／ぶどう畑を荒らす小狐を。／私たちのぶどう畑は花盛りですから。

\* イエスは光の中を歩まれたが、狐は夜に行動する。

(3) 「わたしは今日と明日、悪霊どもを追い出し、癒やしを行い、三日目に働きを完了する」

- ①イエスは、ご自分の計画に従って、予定どおりにエルサレムに向かう。
- ②「今日と明日」「三日目に」
  - \* 短時間を意味する格言的表現である。
- ③残された時間は短い、いつものように奉仕を続けるという意味である。
  - \* いくつかの悪霊どもの追い出し
  - \* いくつかの癒やし
- ④「三日目に働きを完了する」
  - \* 短時間の最後の日に、公生涯における奉仕を完了する。

2. 33節

**Luk 13:33** **しかし、わたしは今日も明日も、その次の日も進んで行かなければならない。預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ないのだ。』**

(1) イエスの旅は、父なる神に従順に歩む旅である。

①イエスは、一貫して忠実なしもべとして歩まれた。

(2) この旅の目的地は、エルサレムである。

①イエスは、エルサレムでの受難を奉仕の総仕上げと見ていた。

②イエスは、多くの預言者がエルサレムで殺されたことに言及する。

③自分がその伝統から外れることはあり得ないと宣言する。

**III. イエスの嘆き (34～35節)**

1. 34節

**Luk 13:34** **エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。**

(1) エルサレムに関心が向けられる。

①33節にエルサレムということばが出ていた。

②ここでは、「エルサレム、エルサレム」と2度出ている。

③エルサレムは、神の救済計画が進展するための中心地である。

(2) エルサレムは神の愛を拒否し続ける。

①エルサレムは、イスラエルの民全体を象徴することばである。

②彼らは、預言者たちを殺す。

③彼らは、自分に遣わされた人たちを石で打つ。

(3) しかしイエスは、エルサレムを愛した。

①めんどりがひなを翼の下に集めるように、イスラエルの民を集めようとした。

\*イエスは優しく民に語りかけた。

②しかし彼らは、それを望まなかった。

③これまでイエスは、彼らに神の国を提供し続けて来たが、それが終わる。

2. 35節

**Luk 13:35** **見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』／と言う時が来るまで、決しておまえた**

ちがわたしを見ることはない。」

(1) 「見よ、おまえたちの家は見捨てられる」

①これは、エルサレム崩壊の預言である。

\* 「家」とは神殿、エルサレム、イスラエルという国などのことである。

②頑なな心のゆえに、ユダヤ人たちは離散の民となる。

③離散の歴史は、今も続いている。

(2) イエスの嘆きは、バビロン捕囚を預言したエレミヤの嘆きに似ている。

①エレ 12 : 7

Jer 12:7 わたしは、わたしの家を捨て、／わたしのゆずりの地を見放し、／わたしが心から愛するものを、／敵の手中に渡した。

②エレ 22 : 5

Jer 22:5 しかし、もしこのことばを聞かなければ、わたしは自分にかけて誓うが——【主】のことば——この家は必ず廃墟となる。』

(3) 最後に、希望のメッセージが語られる。

①「おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない」

②ユダヤ人たちがイエスを迎える時に、イエスは来られる。

③この預言は、再臨の直前に成就する。

結論

1. めんどりの翼の下

(1) ユダヤの伝統では、ユダヤ人は神の翼の下に置かれている。

(2) 異邦人伝道は、異邦人を神の翼の下に置くことである。

(3) 申 32 : 10~11

Deu 32:10 主は荒野の地で、／荒涼とした荒れ地で彼を見つけ、／これを抱き、世話をし、／ご自分の瞳のように守られた。

Deu 32:11 鷲が巣のひなを呼び覚まし、／そのひなの上を舞い、／翼を広げてこれを取り、／羽に乗せて行くように。

(4) 詩 17 : 8

Psa 17:8 瞳のように私を守り／御翼の陰にかくまってください。

(5) 詩 36 : 7

Psa 36:7 神よ あなたの恵みはなんと尊いことでしょう。／人の子らは 御翼の陰に身を避けます。

(6) エレ 49 : 22

Jer 49:22 見よ。彼は鷲のように舞い上がっては襲いかかり、ボツラに敵対して翼を広げる。その日、エドムの勇士の心も、産みの苦しみにある女の心のようになる。

(7) イエスは、神の役割に関する伝統的な比喩を、ご自身に適用された。

- ①イエスは神である。
- ②イエスは、イスラエルの民をローマの圧政から救おうとされた。
- ③イエスに信頼するとは、イエスの臨在という翼の下に逃げ込むことである。

## 2. 再臨のタイミング

(1) ユダヤ人たちは、勝利の入城までイエスを見ることはない。

- ①「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」は、メシアを歓迎する祈り。
- ②1回目の勝利の入城は終わったが、この預言が成就したわけではない。

(2) マタ 23 : 39

Mat 23:39 わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

- ①この預言は、勝利の入城（マタ 21 章）の後で語られたものである。
- ②これは、終わりの日における勝利の入城である。

(3) メシア再臨の条件

- ①ユダヤ人たちがイエスをメシアとして受け入れることである。
- ②ユダヤ人たちが回心するためには、患難期を通過する必要がある。
- ③患難期→ユダヤ人たちの救い→メシアの再臨→メシア的王国の設立

ルカの福音書 69回  
食卓での諸々の教え（1）

14：1～11

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ 13：18 から、中心テーマが「神の国」に変わった。
- ③神の国とは、メシア的王国（千年王国）のことである。

(2) ルカ 13：18～14：35 の内容

- ①神の国のたとえ話（13：18～21）
- ②神の国への入国（13：22～30）
- ③神の国の延期（13：31～35）
- ④食卓での諸々の教え（14：1～24）
  - \*水腫の人の癒やし（1～6 節）
  - \*結婚の披露宴のたとえ話（7～11 節）
  - \*客を招くときの教訓（12～14 節）
  - \*盛大な宴会のたとえ話（15～24 節）
- ⑤弟子の代価（14：25～35）

(3) 注目すべき点

- ①4つの教えは、パリサイ人の家での食卓でイエスが語ったものである。
- ②直前の文脈を見ると、イエスはエルサレムの崩壊を予告された（13：35）。

Luk 13:35 見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』／と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

- ③ここでは、その原因がリーダーたちにあることが明らかになる。

2. アウトライン

- (1) 水腫の人の癒やし（1～6 節）
- (2) 結婚の披露宴のたとえ話（7～11 節）

3. 結論

- (1) キリストの模範
- (2) 個人的適用

食卓での諸々の教え(1)について学ぶ。

### I. 水腫の人の癒やし(1~6節)

#### 1. 1節

**Luk 14:1 ある安息日のこと、イエスは食事をするために、パリサイ派のある指導者の家に入られた。そのとき人々はじっとイエスを見つめていた。**

(1) ここでルカは、バランスを取っている。

①ルカ13:10~17は、腰の曲がった女の癒やしの記事であった。

②この箇所は、水腫の男の癒やしの記事である。

(2) イエスは、パリサイ派のある指導者の家で食卓に着いた。

①パリサイ派のある指導者とは、サンヘドリンの議員であろう。

②この人物がイエスに好意的であったわけではない。

③パリサイ人たちは、イエスに激しい敵意を抱いていた(11:53~54)。

④彼らは、イエスを逮捕する機会を狙って、じっとイエスを見つめていた。

\*「目を皿のようにして」(リビングバイブル)

(3) イエスが食事に招かれたのは、安息日であった。

①イエスとパリサイ人たちの間には、安息日をめぐり解釈の違いがあった。

②これまでに、イエスは何度も安息日の規定を破ってきた。

③彼らは、イエスが律法に違反するように、罠を仕掛けたのである。

④食卓をともにするのは友情のしるしであるが、ここにあるのは偽善である。

#### 2. 2節

**Luk 14:2 見よ、イエスの前には、水腫をわずらっている人がいた。**

(1) 水腫をわずらっている人は、意図的にそこに置かれたのであろう。

①これは、イエスを逮捕するための罠である。

②水腫をわずらっている人は、イエスの前にいた。

(2) 「水腫」

①からだに余分な体液がたまっている状態である。

②心臓や腎臓などの機能障害が原因となって起こる症状である。

③ラビたちは、水腫の原因は、不道徳にあると考えていた。

#### 3. 3~4節

**Luk 14:3** イエスは、律法の専門家たちやパリサイ人たちに対して、「安息日に癒やすのは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか」と言われた。

**Luk 14:4** 彼らは黙っていた。それで、イエスはその人を抱いて癒やし、帰された。

- (1) ここではイエスから先に動いた。
  - ①パリサイ人たちは、防御する側に立たされた。
  - ②イエスは、モーセの律法の解釈について質問した。  
「安息日に癒やすのは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか」
  
- (2) パリサイ人たちは、黙っていた。
  - ①そこでイエスは、その人を癒やした。  
\*翌日まで待たないで、安息日に癒やした。
  - ②抱いて癒やした。  
\*心の癒やしが伴っていた。
  - ③その人を帰された。  
\*本人を論争の現場から遠ざけることで、議論に集中できる環境を作った。

#### 4. 5～6節

**Luk 14:5** それから、彼らに言われた。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者が、あなたがたのうちにいるでしょうか。」

**Luk 14:6** 彼らはこれに答えることができなかった。

- (1) イエスは、旧約聖書や口伝律法に言及する。
  - ①自分の息子や牛が井戸に落ちた場合、安息日であってもすぐに引き上げてやる。
  - ②イエスは、水腫の人はイエスの所有物であることを示唆している。
  - ③イエスは、天地の創造主であり、所有者である。
  
- (2) パリサイ人たちは、これに答えることができなかった。
  - ①イエスの論理は、論駁不可能なものである。
  - ②彼らは、イエスが人のいのちを優先させていることを知っていた。
  
- (3) この出来事は、次に続く教えを語るための舞台設定となっている。
  - ①イエスは、権威あるお方として神の国についての教えを語る。

## II. 結婚の披露宴のたとえ話(7～11節)

### 1. 7節

**Luk 14:7** イエスは、客として招かれた人たちが上座を選んでいる様子に気がついて、彼らに

**たとえを話された。**

- (1) イエスは、招かれた人たちに対して、謙遜の重要性について教える。
  - ①ルカはこの教えを、「たとえ」と表現している。
  - ②この話は、人間関係における謙遜を教えているだけではない。
  - ③この話は、神との関係における謙遜も教えている。
  - ④これは、パリサイ人たちのプライドを矯正するための教えである。
  
- (2) 当時の正式な食卓での習慣
  - ①U字型の食卓の周りで、左肘をついて、横になった状態で食事をする。
  - ②主人に近い席ほど、より栄誉ある席である。
  - ③彼らは、自分が重要な人物であることを示すために、上席を選んでいった。

2. 8～9節

**Luk 14:8 「結婚の披露宴に招かれたときには、上座に座ってはいけません。あなたより身分の高い人が招かれているかもしれません。」**

**Luk 14:9 あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください』と言うことになります。そのときあなたは恥をかいて、末席に着くことになります。」**

- (1) 「招かれた」がキーワードである。
  - ①動詞は「カレオウ」である。
  - ②8(2回)、9、10(2回)、12(2回)、13、16、17、24節
  
- (2) パリサイ人がイエスを招いた食卓は、結婚の披露宴ではない。
  - ①しかし、たとえ話の中の宴会は、結婚の披露宴である。
    - \*イエスは、メシア的王国の始まりに開かれる宴会を想定しておられる。
    - \*その宴会とは、子羊と教会の結婚の披露宴である。
  - ②ユダヤ人たちは、日常生活の中で経験することから霊的教訓を学ぶべきである。
  - ③もし披露宴で、上席を選ぶなら、後で恥をかくことになる。
    - \*これは誰もが経験していることである。
  
- (3) 霊的教訓
  - ①神の国で最も重要な資質の1つが、謙遜である。
  - ②人は自分で上席を選ぶことはできない。
  - ③それゆえ、自らへりくだることを学ぶべきである。
  - ④高い地位を求めるとは、イエスの弟子となることを求めるべきである。
  - ⑤自らを低くするなら、神が高く上げてくださる。

### 3. 10~11節

Luk 14:10 招かれたなら、末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『友よ、もっと上席にお進みください』と言うでしょう。そのとき、ともに座っている皆の前で、あなたは誉れを得ることになります。

Luk 14:11 なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

#### (1) 末席に座る理由

- ①自分は主人ではなく、招かれた客人である。
- ②「あなたを招いた人」とは、神への言及である。
- ③神は自らを低くする人を、高く上げてくださる。
- ④その人は、皆の前で誉れを得ることになる。
- ⑤神の国における地位は、自力で獲得するのではなく、神によって与えられる。

#### (2) 「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる」

- ①自分を高くする者は、恥を見る。
- ②謙遜な者は、高くされる。
- ③この原則は、今の世においても、メシア的王国において有効である。
- ④謙遜になるとは、イエスの弟子として歩むことである。

## 結論

### 1. キリストの模範

#### (1) ピリ 2:5~9

Php 2:5 キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。

Php 2:6 キリストは、神の御姿であられるのに、／神としてのあり方を捨てられないとは考えず、

Php 2:7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、／人間と同じようになられました。／人としての姿をもって現れ、

Php 2:8 自らを低くして、死にまで、／それも十字架の死にまで従われました。

Php 2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、／すべての名にまさる名を与えられました。

- ①キリストは低くなられた。
- ②神はキリストを高く上げた。

#### (2) ピリピ教会の人間関係の問題は、キリストの模範に倣うことによって解決する。

- ①この原則は、今も有効である。

## 2. 個人的適用

### (1) ルカ 13：30

Luk 13:30 いいですか、後にいる者が先になり、先にいる者が後になるのです。」

(2) 現代人も、宴会で上席を求める人のようにあくせく働いている。

①地位や収入

②衣食住

③有名人との交友関係

(3) むしろ、私たちが求めるべきは、奉仕の場である。

①キリストの弟子となること

②隣人愛の実践

ルカの福音書 70回  
食卓での諸々の教え（2）

14：12～24

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ13：18から、中心テーマが「神の国」に変わった。
- ③神の国とは、メシア的王国（千年王国）のことである。

(2) ルカ13：18～14：35の内容

- ①神の国のたとえ話（13：18～21）
- ②神の国への入国（13：22～30）
- ③神の国の延期（13：31～35）
- ④食卓での諸々の教え（14：1～24）
  - \*水腫の人の癒やし（1～6節）
  - \*結婚の披露宴のたとえ話（7～11節）
  - \*客を招くときの教訓（12～14節）
  - \*盛大な宴会のたとえ話（15～24節）
- ⑤弟子の代価（14：25～35）

(3) 注目すべき点

- ①4つの教えは、パリサイ人の家での食卓でイエスが語ったものである。
- ②直前の文脈を見ると、イエスはエルサレムの崩壊を予告された（13：35）。

Luk 13:35 見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』／と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

- ③ここでは、その原因がリーダーたちにあることが明らかになる。

2. アウトライン

- (3) 客を招くときの教訓（12～14節）
- (4) 盛大な宴会のたとえ話（15～24節）

3. 結論

- (1) 客を招くときの教訓が教える霊的真理
- (2) 現代版「盛大な宴会のたとえ話」

食卓での諸々の教え（2）について学ぶ。

### Ⅲ. 客を招くときの教訓（12～14節）

#### 1. 12節

Luk 14:12 イエスはまた、ご自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や晚餐をふるまうのなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなど呼んではいけません。彼らがあなたを招いて、お返しをすることがないようにするためです。

- (1) 結婚の披露宴のたとえ話（7～11節）は、客たちに向けたものであった。
  - ①謙遜は、神の国での重要な資質の1つである。
  - ②人は、自分で上席を選ぶことはできない。
  - ③自らを低くする（イエスの弟子になる）なら、神が高く上げてくださる。
  
- (2) 客を招くときの教訓（12～14節）は、主人に向けたものである。
  - ①社会的側面
  - ②霊的側面
  
- (3) イエスは、お返しができる人たちを呼んではならないと言われた。
  - ①お返しができる人たちを招いた場合は、お返しを受けるだけで終わる。

#### 2. 13～14節

Luk 14:13 食事のふるまいをするときには、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たちを招きなさい。

Luk 14:14 その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです。」

- (1) 主人が食事に招くべき人たちとは、お返しができない人たちである。
  - ①貧しいひとたち
  - ②からだの不自由な人たち
  - ③足の不自由な人たち
  - ④目の見えない人たち
  
- (2) この原則は、神が罪人を神の国に招く時の原則と同じである。
  - ①神は、無価値な者を招いておられる。

\*イエスの奉仕の特徴は、貧しい人たちを招くことであった。
  - ②これによって、神は栄光をお受けになる。
  - ③ルカ 4：18～19

Luk 4:18 「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わ

たしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、

Luk 4:19 主のめぐみの年を告げ知らせるのである」。

(3) 貧しい人たちを招いた主人は、義の行いをしたことになる。

①その主人は、義人の復活のときに、神から報いを受ける。

\*この主人は、信者である。

\*この主人の行動は、信仰から出たものである。

②訳文の比較

「あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです」（新改訳 2017）

「正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」（新共同訳）

「正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう」（口語訳）

③ここでのイエスの教えは、深遠な霊的真理を含んでいる。

#### IV. 盛大な宴会のたとえ話（15～24 節）

##### 1. 15 節

Luk 14:15 イエスとともに食卓に着いていた客の一人はこれを聞いて、イエスに言った。「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう。」

(1) 客の一人が、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。

①彼は、イエスが神の国の宴会について教えていることを理解した。

②彼は、自分はその宴会の席に招かれると確信していた。

③神の国の宴会に招かれるのは、パリサイ人の特権であると思っていた。

(2) イエスは、この機会を捉えて、誰が神の国に入るのかについて教える。

①ここでも、謙遜の重要性が教えられる。

##### 2. 16～17 節

Luk 14:16 するとイエスは彼にこう言われた。「ある人が盛大な宴会を催し、大勢の人を招いた。

Luk 14:17 宴会の時刻になったのでしもべを遣わし、招いていた人たちに、『さあ、おいでください。もう用意ができましたから』と言った。

(1) このたとえ話の意味

①主人は、神に対応している。

\*神は、メシア的王国を準備された。

②しもべは、イエスに対応している。

\*御子イエスは、神の国の到来を宣言し、人々を招かれた。

③招かれたのは、主にユダヤ人である。

\*彼らは、「招いていた人たち」である。

④イエス時代、宴会の準備には時間がかかった。

\*神は、時間をかけて御国の宴会の準備をしておられた。

### 3. 18～20 節

Luk 14:18 ところが、みな同じように断り始めた。最初の人是这样言った。『畑を買ったので、見に行かなければなりません。どうか、ご容赦ください。』

Luk 14:19 別の人は这样言った。『五くびきの牛を買ったので、それを試しに行くところです。どうか、ご容赦ください。』

Luk 14:20 また、別の人は这样言った。『結婚したので、行くことができません。』

(1) ところが、みな同じように断り始めた。

①断りの理由が3つ、代表例として挙げられている。

②これ以外にも、多くの理由が考えられる。

③これは、優先順位をどうするかという問題である。

(2) 3つの理由

①「畑を買ったので、見に行かなければなりません」

\*この人は、土地の所有者となったことを誇っている。

\*この人は、共同体の中で尊敬を受けることを期待している。

②「五くびきの牛を買ったので、それを試しに行くところです」

\*この人は、宴会への招きよりも、新しく手に入れが牛に興味がある。

\*この2人は、買う前に十分吟味していたはずである。

\*買ってからも吟味しようとするのは、物欲に支配されているからである。

③「結婚したので、行くことができません」

\*この人は、宴会への招きよりも、人間関係を優先させた。

### 4. 21～22 節

Luk 14:21 しもべは帰って来て、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちをここに連れて来なさい。』

Luk 14:22 しもべは言った。『ご主人様、お命じになったとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』

(1) 主人が怒るのは、当然のことである。

- ①主人は、恵みによる招きを与えていた。
- ②主人は、大きな犠牲を払って宴会の準備をしてきた。
- ③拒否は、主人に対する侮辱である。
- ④この招きを拒否したのは、イエス時代の宗教的指導者たちである。

(2) 「急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちをここに連れて来なさい」

- ①そこで主人は、指導者たちが見下していた者たちを招くことにした。
- ②宴会の準備ができていたので、急いで新たな客を招く必要があった。
- ③多くの人が招きに応答したが、まだ席に余裕があった。
- ④そこで主人は、意外な人たちまで招くことにした。

#### 5. 23～24節

**Luk 14:23** **すると主人はしもべに言った。『街道や垣根のところに出て行き、無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいになさい。**

**Luk 14:24** **言っておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません。』**

- (1) 当時の習慣では、客が全員揃うまで宴会は始まらない。
  - ①そこで主人は、しもべを町の外まで遣わすことにした。
  - ②「街道や垣根のところ」にいる人たちとは、異邦人である。
    - \*彼らは、町から遠く離れた所にいる。
    - \*彼らは、契約から遠く離れた人たちである。
  - ③「無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいになさい」
    - \*意志に反してという意味ではなく、熱心に招くことである。
  
- (2) 「あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません」
  - ①最初から招かれていた人たちは、不信仰のゆえに、神の国から除外される。
  - ②それとは対照的に、契約の外にいた異邦人が招かれる。
  - ③異邦人の救いは、ルカの福音書と使徒の働きを貫くテーマである。

#### 結論

##### 1. 客を招くときの教訓が教える霊的真理

- (1) お返しができない人たちを招くべきである。
- (2) 霊的真理
  - ①その原則を実行する人は、信者である。

- ②彼の行為は、信仰から出たものである。
- ③彼には復活が約束されている。
- ④それが成就するのは、携挙が起こったときである。
- ⑤彼は、神からの報いを受ける。
- ⑥キリストの御座の裁きにおいて、それが起こる（1コリ3:12~15）。

## 2. 現代版「盛大な宴会のたとえ話」

- (1) 山田さんは、新築祝いを計画した。
  - ①上司A、同僚B、部下Cを招いた。
  - ②妻は、3日間かけて食事の準備をした。
- (2) 祝いの当日、彼らに声をかけた。
  - ①上司Aは、高層マンションを買ったので見に行かなければならないという。
  - ②同僚Bは、大口の契約を結んだので、内容を確認する必要があるという。
  - ③部下Cは、新婚なので妻と時間を過ごしたいという。
- (3) その知らせを聞いて、妻は激怒した。
  - ①上司Aは、物欲に支配されている。
  - ②同僚Bは、ビジネスを優先させている。
  - ③部下Cは、人間関係を優先させている。
- (4) 妻は、新たに客を招くことにした。
  - ①ご近所の人たちを招く。
  - ②さらに、ホームレスの人たちを招く。
- (5) 今も、多くの人たちがイエスの招きを断っている。
  - ①物欲、仕事、人間関係
  - ②これは、救いを用意してくださった神への侮辱である。
- (6) 現代版のたとえ話には、重大な欠陥がある。
  - ①神の国の宴会への招きと、新築祝いへの招きは、大いに異なる。